

孫に語る歴史

第3章 古代

谷川 修

第3章 古代

文明の伝播

奈良県法隆寺の回廊にならぶ柱の列は、一つのふんいきをかもしだす。あの柱のふくらみは、遠くギリシアにつらなるものだ。アテネのパルテノン神殿の列柱を、世界のみんが思いうかべるだろう。建物の姿形はローマに伝わり、その流れをくむ建築が、ヨーロッパやアメリカで今でも見つかる。ヨーロッパの人たちは、自分たちの建築の様式がギリシアにさかのぼる、と思っているだろう。でも、それで話は終わりだろうか。ギリシアの大きな建物のお手本は、メソポタミアやエジプトにあったに違いない。遺跡の写真を見れば明らかだ。ユーラシア大陸の東のはてから西のはてまで見つかり、形の変化からその伝わり方をたどることのできるものがたくさんある。それらは、じつに長い旅をしたのだ。

物のやりとりは、役立つ道具などが遠くまで運ばれるのを助ける。やがて、交換する物の値うちを、基準になる物で決める習慣ができる。それがおかねのはじまりだ。穀物や貝がらなどが使われた。貨幣の貨という漢字に貝の字が入っているのは、そのなごりだよ。おかねに金の字を使うようになったのは、金が登場してから。ありふれていなくてきびることのない金は、どこでもありがたがられたので、金があればどんな物とも交換できる。世界中で、金が貨幣として通用するようになった。物を順

送りに交換して、文明は遠くまで伝わる。

人も移動する。農耕と定住が始まってからも、大小の集団の移動が続いた。インドに、神々をたたえる古い歌が残されているが、インダス文明のとは違う言葉で書かれている。歌を書いた人々は、インダス文明をつくりあげた人々とは違うのだ。その言葉とヨーロッパの言葉とにつながりのあることに気づいたのは、インドを植民地としていたイギリスから来た人である。日ごろいちばん使う言葉がよく似ているのだ。インド・ヨーロッパ語族という考えが生まれた。ここから世界の言語の系統をさぐる研究が始まった。今では、インドからイランの西北にかけてと、ヨーロッパの言葉が、インド・ヨーロッパ語族に属することが知られている。

インドには、北からこの言葉を話す人々が流入してきた。外見的にも北から南に行くほど肌の浅黒い人が増え、DNAの特徴も北から南への移動を支持する。ここで、前に人種について言ったことを忘れないで。ヨーロッパにも、インド・ヨーロッパ語族の言葉を話す人々が移動したのだろう。古代文明は、メソポタミア・エジプト・地中海東岸から西へ向かった。

四つの古代文明の始まった地域の北の、広大な地域についてこれまで話さなかった。もちろんそこへも文明は広がって行ったのだ。もともとのインド・ヨーロッパ語もこの地域で話されていた、と考えられたりする。ここには広大な草原が続き、歴史が記録される時代になると

遊牧民が活躍する。羊を追う遊牧民は馬も飼っていた。人と文明は、ずいぶん古くから何千 km も東西を行き来した、と考えるべきなのだろう。その南沿いに、のちのシルクロードがある。

馬は背中に荷物を乗せるのに使えるが、車が発明されるとそれを引くのに使われた。シュメール人は、馬の引く戦車を使った。人が馬に乗るようになったのはもっと古く、上で話したばかりの北の草原で始まった、と考えられている。メソポタミアへは、黒海やカスピ海沿岸の遊牧民から伝わったのだろう。中国でもまず戦車がとり入れられ、のちに騎兵が現われた。

農耕民が馬を養うには費用がかかる。近代よりも前の、武具を自前で用意する時代には、騎兵には歩兵よりも裕福な上層の人々になった。戦車も指揮官が乗ったのだろう。ところが遊牧民の兵は、一人で二三頭もの馬を連れている。馬が疲れると乗り換えるのだ。その速さが遊牧民の軍勢の強さなのである。また、農作業に人手をとられないから、老人や子供をのぞく大人全員が兵になれば、大きな騎馬軍団になる。少ない人口で、大きな農耕国家の軍勢に太刀打ちできる。大国が、いつも辺境をうかがう遊牧民に苦しめられた。

ところで、馬やらくだを使う交通手段では、人と物を遠くまで運ぶのに日にちがかかる。それが、政治的・経済的に関係の深い地域が広がるのを制限する。文明が進むと、骨組みをつくり板でおおう大きな船がつくられる。

多くの人とたくさんの荷物を遠くまで運ぶ。地中海世界の発展を、船を抜きに考えることはできないだろう。

税と支配

わたしたちの社会に税というものがある。税は支配といっしょになって、歴史を動かす要因だから、ここで無理をして考えてみよう。

初めは一族の長老を養うために、みんなが生産物を持ち寄ったのだろうか。それがだんだん習慣になり、義務になっていったのだろうか。支配する人と支配される人たちとの身分的な差ができると、生産物の提出は命令になる。氏族や部族の対立と戦争の中で、それが強められたのだと考えられる。もちろん共同体には、食べ物の足りなくなった家族を助けたり、橋をつくったり、自然災害のあとの共同作業のような、公共的な事業がある。古くは、住民みんなが協力し、作業に参加しただろう。

社会に支配者のいるのが普通の状態になると、支配者とその使用人を養うために必要な物を税として集めるようになる。中国や日本の律令制度の税を、租(そ)・庸(よう)・調(ちょう)と言ったが、穀物などの租と布などの調を納めさせ、庸という共同作業に出させるのだ。支配者は、税のほかに、自分の土地の農作業にも庶民を使った。ヨーロッパの中世の村では、領主は水車小屋などの使用料も取った。貨幣が広く通用するようになった中国では、調や庸、やがて租もおかねで集めるようになる。支配者が交代しても、征服者が来ても、税を納めることが支配さ

れる人々の義務となる。時代が移ってもその習慣が残り、政府が公共的な事業をする現代まで、その費用を税として集めることが続いている。税の中には、昔の習慣が形を変えて残っているものがあるだろう。

王と有力者たちが協力して国を建てたとしてみよう。領地を分配された有力者は、自分の領地で配下を養う。王の方は大きな領地をとり、多くの家臣・使用人をおかえり。国を治める王の出費は多いから、税を集めることは大きな事業となる。家臣や役人に給料を払う代わりに、領地を与えるあるいは税を集める権利を与えるなどして、税の取りたてを簡略化することが起きた。もとの領主に加え、王の役人も領主化する。王や有力者の配下は、はじめから領地をもらうことが多かったから、複雑な支配の序列ができる。戦争などで収入が足りない場合、王は全国の土地に一定割合の税を課そうとして、領主層との対立が生じた。奇妙に聞こえるかもしれないけれど、もうけのある収税の仕事を、おかねを払って請け負うこともあった。日本の宝くじはそれに近い。

ヨーロッパや日本の封建制では、かつては王の同輩であった領主も、王の家来から領主になった者たちも領地を与えられて、自分の配下を養った。下級の者は、上級の領主に従って戦争に行くことで領地をみとめられる。支配権を強くしようとする王は、大きな軍勢をそろえなければいけないが、軍人をうまく支配することに頭を悩ませます。大きな軍隊をもつと費用がかかるので、そこでも

税の問題がもちあがる。たいてい、軍人の幹部がついには領主化する。トルコがエジプトに送った軍人奴隷が、エジプトの王になるということまで起きた。

どの国でも王の支配がゆるめば、税が現地の管理者などの手元にとどまるようなことが起きる。地方の領主や役人たちは、それぞれ自分の取り分を増やすことに精を出し、王は税を思い通りに取りたてることができなくなる。支配の体制は行きづまる時がくるのである。たとえば、日本の室町時代に、朝廷につづいて幕府の取り分がしだいに減っていった。

スパルタでは、十数万人の隷属民を働かせて生産物を得た。直接的に人を支配したと言えるだろう。ローマでも、大きな荘園で奴隷に仕事をさせていた。奴隷の数が多いから、大きな反乱が起きることもあった。近代になってからも、東ヨーロッパの領民は、封建時代のように、税だけでなく領主の強い支配下にあった。ロシア帝国の農民を農奴と呼ぶことが多い。日本の歴史に奴隷という言葉はあまり出ないけれど、安寿と厨子王は、売られて山椒大夫の荘園で働かされ、逃げるのに命がけだったから、奴隷と言えるだろう。江戸時代の農村では、村の有力者がまとめ役になって、連帯して税(年貢、ねんぐ)を領主に納めた。その代り村人は、ある程度自治的に共同体を管理した。近代のような自由はなかったが、村の支配はそれなりに能率化されていたことになる。

3.1 西アジアとヨーロッパと北アフリカ

西アジア世界の形成

鉄器の話から始めよう。鉄はメソポタミアやエジプトの古い遺跡で見つかるようだが、鉄製の武器を本格的に使用したのは、アナトリア(トルコ)にあったヒッタイト王国だ。紀元前 1400 年代のことらしい。いつでも武器は、その当時の最も新しい技術を取り入れたものによっていく。ヒッタイト王国は、鉄製の武器の威力もあって領土を広げ、バビロン王国をほろぼし、シリアまで支配していたエジプトとも戦った。ところで、それまでメソポタミアとその周辺に登場した人々は、セム語系と呼ばれる言葉を使っていた。古代エジプト語も同じセム語系に属する。これに対して、新来のヒッタイト人は、インド・ヨーロッパ語族の言葉を使っていた。

ヒッタイト王国が栄えた時代とそのあとも、メソポタミアとその周辺の地域で、国々の競争が続く。地中海に面する地域フェニキア(シリア)では、紀元前 2000 年代前半から都市国家を築き、その後も繁栄を続け、東地中海の物と人の流れの中心地だった。エジプトなど周辺の国が、その地をねらうことがしばしばであった。文明の十字路というその地理的な重要性は、ずっと後世まで続く。その東地中海地域でセム語系の言葉を使っていた人々が、前代からの文字を改良して、フェニキア文字をつくった。言葉の音を、子音(しん)と母音(ぼん)に分けて表現する。

そうすれば、文字記号は 20 個あまりで足りる。アルファベットだ。フェニキアの南のパレスティナには、ヘブライ人が王国を築いた。

紀元前 700 年の前後に、メソポタミアのアッシリアが強くなって、領域国家よりも大きな帝国を築いた。騎兵の軍団をもつ軍事大国で、地中海まで達し、一時期エジプトも支配した。しかし、その国もまた亡ぶ。

次に新バビロニア王国が地中海東岸を征服したとき、パレスティナにあったユダヤ王国のヘブライ人たちはバビロンへ連行した。このできごとはバビロン捕囚(ほしゅう)と呼ばれている。その地でユダヤ人の宗教は独特のものになり、解放されたのちにユダヤ教という宗教ができた。彼らも以前は神々をあがめていたのに、人格をもつ一人の神を崇拜するようになった。そして神の像をつくることをタブーとした。後世、その神は、西アジアからヨーロッパまでの人々が崇拜する神になる。

この頃、アナトリア(トルコ)半島にあったリディア王国で、最初の金貨がつくられた。この時代に、メソポタミアの東にも、イラン系のメディア人が建てた大きな王国が登場する。リディア人とイランの人々の言葉は、インド・ヨーロッパ語族に属す。先進地域の周辺でも文明が発展し、国々の闘争は地域をまたいで広がる。

紀元前 700 年頃、アケメネスという男が、イラン系ペルシア人をひきいて移動していた。次の代に、ペルシア

人はイランの湾岸に定住し、メディア人の支配のもとにあった。その海は、のちにペルシア湾と呼ばれるようになる。ここまで出てきたペルシアやアケメネスという名は、ギリシア人の呼び方からきている。

紀元前 500 年代中頃、キュロス 2 世という王が、メディア王国を倒して、アケメネス朝ペルシアを建てた。イラン全域を支配すると、文明発祥の地である西方へ向かい、新バビロニア王国を征服した。リディア王国も征服する。さらに、北の遊牧民の侵入を防ぐために、中央アジアまで遠征する。次の王がエジプトを倒した。

フランスの思索家モンテーニュが、『エッセー』の中の悲しみを考えた章に、次の話を引用している。捕えられたエジプト王は、目の前を、奴隷の服装をした自分の娘が水汲みをさせられて通ると、息子が処刑場に引かれて行くのを見た。その悲しみに耐えていた王は、臣下の一人が捕虜たちと連れて行かれるのを見たところで、ついにこらえきれずに、自分の頭をたたいて悲しみを表わした。それまで 2500 年間、まれに侵略されることはあったが、26 代の王朝が続いた古代エジプトは、ついに終わりの時期を迎えた。これ以後、地中海と紅海にはさまれた狭い陸地は、エジプトをアジアから切りはなす役目を果たさなくなる。

ペルシア王は、征服した国々の王の位についた。王の中の王ではなく、いくつもの領域国家から成る帝国を一人で支配する大王となった。ところが、王朝には王位を

奪いあう争いがつきものである。神官が王位をかすめとったが、王位を奪い返したダレイオス 1 世が、帝国を継いだ。ダレイオスは反乱を平定し、東はインダス川まで、アフリカではエジプトの西のリビアまで進出し、北西にはヨーロッパのエーゲ海北岸まで遠征した。こうしてペルシア帝国は、一つの世界、西アジア世界の一体性をつくり出した。以後、エジプトとその西まで巻きこんで、西アジア世界の歴史が書かれることになる。

戦争に勝って統一を果たした大王の仕事は、政治の体制を整えることであった。国々を分けて多くの州に編成し、行政制度、税、貨幣、交通などを整備していった。中央に権力を集中する体制ができ上がる。続く 200 年間は、その制度が西アジア世界にしみこんでいく過程であった。中央の官僚や州の総督などの支配者たちも、支配される人々もそれを経験し、共通の政治的習慣や文化が植えこまれる。ペルシア帝国は、言わば、アレクサンドロスが来るのを準備した。

その後のどこの王朝の歴史も、ペルシア帝国の初めから終わりまでの物語とたいして違わないと、ペルシア人なら言うかもしれない。ところで、ここまでの西アジアの歴史は、近代になってからは、ヨーロッパの研究者によって研究されてきた。日本人は、現代に至るまでの西アジアの歴史を、ヨーロッパ人の目を通して学んできた。このことは知っておいた方がよいだろう。

古代ギリシア

ペルシアのダレイオス 1 世が、黒海入口の海峡を渡ってヨーロッパへ侵入したことを話した。海峡付近とエーゲ海の北岸には、ギリシア人が植民していた。それよりも前に征服されたアナトリア(トルコ)の西岸には、ギリシア人の多くの植民都市があり、ギリシア人はイオニアと呼んでいた。そこは、第一次世界大戦後にもギリシアとトルコが領有を争ったところだ。今ではその沖の島々だけがギリシア領である。その島々から、アジアはすぐ目の前に見える。アジアという言葉は、エーゲ海の東側を意味していたらしい。ヨーロッパという呼び名の方は、神話上の女性エウロペの名にちなむ。フェニキア人が父親で、ギリシアの神々の王ゼウスがクレタ島へ誘拐し最初の妻としたという。対抗するアジアとヨーロッパは、エーゲ海から始まったのだ。

人はだれでも、先に文明を進めた人々のおかげを受けている。ギリシアは、エジプトと西アジアの文明を受けとりながら発展した。古代の国際的な海上交易の場は、東地中海にあった。西アジアから地中海を西に進むと、かなめの位置に大きなクレタ島がある。エーゲ海の入口にあるその島が、最初に海上交易に参加して栄えた。古くからの遺跡が見つかり、紀元前 1600 年代に最盛期をむかえたことが知られる。クレタ島を統一した王は、クノッソスに大きな宮殿を築いた。君たちは迷路遊びが好きだったね。迷宮という言葉は、クノッソスの大きな宮殿

についての伝説から生まれたのだよ。

クレタ文明を追って、バルカン半島南部で、インド・ヨーロッパ語族のギリシア人が、文明開化の道を進む。紀元前 1600 年頃から 1200 年頃まで、ミュケナイ^{*)}を中心とする文明がおこった。石造りの城壁で囲まれた都市の遺跡がいくつも見つかっている。国々を建て、王たちが支配していたようだ。ミュケナイの王が総大将になって、各地のギリシア人とトロイアに遠征したという物語は、この時代のことを語る。のちにホメロスによって、長編叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』に歌われた。オデュッセイアはギリシア西岸の出身だから、エーゲ海の交易がクレタ文明時代よりも広がったことが知られる。しかし、この文明はやがてほろびる。

その後めだつ遺跡がなく、歴史家によって暗黒時代と呼ばれる時代が、紀元前 700 年頃まで続く。この時代に、青銅器に代えて鉄器を使うようになった。また、日本の仮名のように一つの音に一つの文字をあてていたのを改めて、フェニキア文字をまねてアルファベットを使うようになった。アルファベットという呼び名は、ギリシア文字先頭の α (アルファ) と β (ベータ) から来ている。

*) ギリシア人は、自分の国をヘラスと呼ぶ。現代では、h を発音せずエラスと言うそう。ここでは、日本での習慣に従いギリシアと呼ぶ。ただし、都市や人の名を現地読みにして、アテネはアテナイ、ミケーネはミュケナイとしよう。

都市国家がまた現われるまでのことはよく分かっていない。ギリシアの王権は、地中海東の先進地域とは違って、強く発展することがなかった。独自の条件があったのだろう。あるいは、さまざまなことが起きるほどの年代を重ねなかったということだろうか。紀元前 700 年代になると、広い土地を所有する貴族層を中心に集まって住むようになり、都市が形成される。農民は自分でも土地や奴隷をもち、貴族層との差が大きくなかったようだ。エーゲ海の東や北に、さらにイタリアやシチリア島まで移住して、多くの植民都市をつくった。地中海各地に広がったギリシア人たちはさかんに交易し、農業・手工業・商業が発展した。そうして、土地貴族でなかった市民も力をつけていった。また、この頃ギリシアでは、槍と盾をもつ戦士が密集して方形に整列する、重装備の歩兵戦術が主流となった。その戦列に加わる市民は、騎馬の上層市民に対抗して、発言権が強まる。戦士は自分で武装の費用を出した。アテナイの哲学者ソクラテスも、その戦列に三度加わったということだ。

貴族と平民の対立は、独裁者を生むというような混乱を経ながら、貴族層の力がしだいに弱まっていく。たどりついた民主制と呼べる体制は、都市ごとの事情によって違っていた。すでにスパルタのことに触れた。市民は発言権をもつものの、貴族層が主導権をにぎっていた。アテナイでは、およそ 200 年間の政争と改革を経て、紀元前 500 年頃に民主制になった。貴族層を支えた血縁的な 4 部族を、地区ごとの 10 部族に編成変えして、議会に

当たる五百人評議会をつくる。アテナイ市民は、国家の大事に対して平等な投票権をもっていた。こうしてできたギリシアの都市国家の政治体制は、当時のほかの国々の王政と異なっていた。

紀元前 492 年に始まったペルシア戦争のきっかけは、エーゲ海東岸イオニアのギリシア人が、ペルシア帝国に対し反乱を起こしたことである。アテナイともう一つの都市が反乱に加勢したが、結局平定されてしまう。大王ダレイオスは、こらしめのために、海を越えて二つの都市に軍隊を送った。ペルシア軍はアテナイの北東に上陸して迫る。名高いマラトンの戦いである。アテナイ軍は勝利し、走ってその知らせを伝えたという故事から、今のマラソン競技は始まった。

紀元前 480 年、ペルシアの次の王は、海と陸の大兵力でギリシア征服に向かう。ギリシア側は連合を組んだ。スパルタが指揮する陸軍が北の防衛線を破られると、アテナイは国土を荒らされるにまかせ、海上で決戦する作戦でのぞんだ。それは成功して、アテナイ沖のサラミスの海戦に勝利すると、ペルシア王はアジアに引き上げた。エーゲ海北岸にとどまっていたペルシア陸軍は翌年南下したが、今度はギリシア側が勝った。それ以後、ペルシアがギリシア本土を攻めることはなくなる。

専制君主の国に対する勝利は、ギリシアの民主制を助け、自由な市民という考えを強めるように働いた。ギリ

シアは繁栄する。ところで、戦後、アテナイ海軍に勝てる海軍力をもつ国はなくなった。アテナイは、ほかの都市に呼びかけて、ペルシアに備えるデロス同盟をつくる。指導者ペリクレスの頃に、アテナイは覇者となり、デロス同盟の金庫をアテナイに移す。集めたお金は、アテナイのあのパルテノン神殿の建設にも使われた。都市国家アテナイの内部では、民主化がいっそう進んだ。

自由な市民たちは、多くの分野でギリシアの名を消せないほどすぐれた文化を創造した。プラトンは、師であるソクラテスの登場する対話集を書いてその哲学を紹介し、自身の思想を書物に書いた。プラトンの開いた学園アカデメイアで学んだアリストテレスは、プラトンとは違う考え方に進み、広く思索して哲学を体系的に記述した。これら3人の哲学者は、ヨーロッパ哲学の始祖で、現代もその思想が議論される。思索だけで、万物が要素のあつまりだという原子論に到達した人に、デモクリトスがいる。トゥキュディデスの前に、ヘロドトスという人も『歴史』を書いた。悲劇や喜劇の作家、アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス、アリストファネスの名もあげておくべきだろう。大人になったら読んでくれたまえ。ギリシア彫刻の写真はどこかで目にする。すばらしいものだね。建築については、もう代表のパルテノン神殿のことを言った。弁論がさかんで、ほかの地域で見られないほど論理学が進んだ。

きっと、言うべきことがまだまだあるのだ。これらの成果は、のちにヨーロッパにひき継がれて、その文明の

基礎を成している。ヨーロッパやアメリカの人たちの教養となっているから、英語がうまく話せることよりも、それらについて知ることの方が大事とさえ言える。

ギリシアでアテナイの覇権が続くと、反感をもつ都市が、ペロポネソス半島にあるスパルタを中心に、ペロポネソス同盟を結んでデロス同盟に対抗した。紀元前 431 年、ついにペロポネソス戦争と呼ばれる戦争が始まる。トゥキュディデスの『歴史(戦史)』は、この戦争の前半をくわしく書いている。アテナイは、シチリア島への遠征で敗けると守勢に立たされ、紀元前 404 年に降伏した。ギリシア社会は戦争で深刻な傷を負い、平民は前ほどの力をもたなくなった。都市国家は衰え始める。

ギリシア文化の広がり

ダレイオス 1 世がエーゲ海北岸へ遠征したとき、その西にマケドニアという発展途上国があった。ペロポネソス戦争の時代にも、マケドニアはまだ端役でしかなかった。ギリシア文明のとりこみに励み、やがて都をエーゲ海沿岸に移す。そして紀元前 338 年、アレクサンドロスの父王が、ギリシア諸都市の同盟軍を破った。父がマケドニアの侍医だったアリストテレスが、王子アレクサンドロスの家庭教師だったという話は有名だ。

王位継承の争いがあったようだが、20 歳のアレクサンドロスが王位を継ぐ。若い王が波乱のあったギリシアを平定したときのエピソードを、モンテーニュが引用して

いる。反抗したテーバイ市で、血の最後の一滴が流されるまで兵士を殺し、武器をもたない老人や子供と女性らのところではじめて止んだ。3万人の奴隷を得ようとしたのだ一と。紀元前334年、マケドニア軍4万とギリシア同盟軍8千が、昔のペルシア戦争のふくしゅうのために、ペルシア帝国へ向かった。ペルシアの大王の名は、またダレイオス(3世)であった。

紀元前333年、アナトリア半島の南のつけね、フェニキアの手前イッソスで、アレクサンドロスは歴史的な勝利をあげた。翌年エジプトをなんなく征服すると、次の年にはメソポタミアに出る。ペルシア側最後の決戦にも勝利すると、首都ペルセポリスを落とした。史上最初の大帝国の首都は、略奪破壊され、焼き払われた。遺跡の写真を見るとその壮大さがうかがわれる。ペルシア帝国が分解しダレイオス3世が殺されると、アレクサンドロス大王は新たな遠征に乗り出した。イラン北部のカスピ海から、中央アジアのタシケントにまで至る。インド北部に侵入したが、将兵に反対され、インダス川に沿って帰途についた。このとき、アラビア海からペルシア湾まで、海路をとった艦隊もあった。バビロンに帰還したのは紀元前323年のこと。

遠征物語の背後には、若い英雄の力量に加えて、ペルシア帝国が衰えていたこと、各地で協力者を得たことなどがあるだろう。ペルシア帝国とマケドニア・ギリシアを足した大きな国を支配するのに、旧帝国の制度を取り

入れることは、避けられないことだったろう。従軍した将兵の反対を押さえて、東方化の政策が採用される。彼と1万人の将兵が、西アジアの女性と集団結婚式をあげたそうだと。ところが、若い大王は急死する。彼の大帝国がどのような道をたどるか、歴史は試されなかった。

帝国は、マケドニアの王家と将軍たちの国に分割された。プトレマイオスがエジプトをとり、セレウコスがシリアからイラン東方まで支配した。しかし60年あまりで、イランはパルティア王国に取り返され、その東に、ギリシア人の支配するバクトリア王国ができた。

ギリシア文化は、エジプト・西アジアに伝わり、その東のはてにまで及んだ。マケドニア人はギリシア人に含まれるから、この時代あるいはその文化を、「ヘラス(ギリシア)の」という意味をこめて、ヘレニズムと呼んでいる。ギリシアのすぐれた学芸は、西アジアでも受け継がれたのである。

プトレマイオス朝のエジプトでは、マケドニア人を中心とするギリシア人が、昔からのエジプトの官僚制度を利用して支配し、古い伝統が残った。たとえば、兄と妹(姉と弟)が王と女王になって支配するような風習をひき継いだ。しかし、大王の名をつけたアレクサンドリアは都が置かれて繁栄し、ギリシアの学問が花開く。そこには当時最大の図書館ができた。幾何学を完成したエウクレイデス(ユークリッド)などの学者が現われた。シチリア島のギリシア人アルキメデスもここで学んだ。

ローマ帝国の成立

ヨーロッパ世界を築くことになるローマは、遅れて世界史に登場する。イタリア半島の中部で、ラテン系の人々とその北の人々が対立しながら、いくつもの都市国家をつくり競争していたようだ。ラテン人の都市国家ローマは、3部族から成り、初期には王がいて、有力氏族の長が元老院を構成していた。軍隊に参加する市民がやはり発言権をもち、民会もあった。紀元前500年頃、王を追放して共和制になったが、ここでも、貴族と平民との長い抗争の歴史をたどる。アレクサンドロス大王の頃には、まだラテン人と北のいくつかの都市を支配するぐらいに過ぎなかった。征服地の人々に、ローマ市民権あるいはそれに準じる資格を与えながら、周辺の都市との戦争に勝っていく。北部をのぞいてイタリアを統一したのは、紀元前200年代前半のことである。

新たに現われたローマの前には、地中海の対岸にカルタゴがあった。フェニキア人の建てた植民都市で、チュニジア地域を根拠地に、北アフリカ・イベリア半島・イタリア沖のサルディニア島に植民都市を築き、勢力をはっていた。二つの国は、存続をかけた100年を超える戦争状態に入り、3度の大きな戦争をする。ポエニ戦争という。カルタゴの将軍ハンニバルが、象もいる軍をひきいてアルプスを越え、イタリア半島に侵入したのは第2次の戦争のときだ。しかしこの2回目も結局ローマ側が勝って、イベリア半島を奪う。紀元前146年、ローマはついにカルタゴをほろぼし、地中海の南岸に領土を得た。

このあいだにも、イタリア北部から東のバルカン半島へ、ローマの拡大は続く。カルタゴを倒した前後に、同じく先進諸国のマケドニアとギリシアの諸都市も征服する。コリントス市が、かつてのテーバイトと似た運命をたどり、廃墟となった。

征服戦争は社会を変える。元老院議員や上層軍人たちはさまざまな地位について利益を得た。広い土地を所有して、戦争で捕えた大量の奴隷を使う経営に変わっていく。国内で社会と政治の変動が続き、征服地でも戦乱が起きた。奴隷の大規模な反乱もあった。イタリア人はローマ市民となって、ローマはもはや都市国家ではない。王のいない大国で、政治の運営をめぐる人間たちの意志がぶつかりあう。現代とどう違うかがあったのだろうか。貴族と平民が対立する中で、名門出身の有力者が、民衆の支持をとりあつて権力闘争をくりかえす。有力者は、将軍となって領土を広げる遠征に出かけ、権力を強めようとした。教科書にはたくさん名がのっている。

中でも、ユリウス・カエサルが抜きんできた人物だった。3人の有力者がローマを牛耳る(ぎゅうじる)ようになったとき、その一人としてガリア(フランス)に遠征し、くわしい報告書『ガリア戦記』を書いた。りっぱな文学作品とされている。カエサルは、政敵を討って終身の独裁官になったが、紀元前44年に、共和制を守ろうとする者たちのクー・デターで殺された。

カエサルの甥オクタヴィアヌスがあとを継いで、もう

一度権力争いが起きた。カエサル の配下 にあつた 将軍アントニウス と、西 と東 に分かれた 戦いは、紀元前 30 年に終わった。オクタヴィアヌスは慎重な人で、自分に権限を集中しながら、元老院の管理する属州もつくり、形の上では君主制にしなかつた。しかし、軍隊を置いた属州の指揮権をにぎる。紀元前 27 年、元老院は彼にアウグストゥス(尊厳)という称号をおくり、実質的に皇帝となった。ローマ帝国は、現代の歴史家がパクス・ロマーナ(ローマの平和)と呼ぶ繁栄の時代をむかえる。

カエサルもアントニウスもエジプトに行った。プトレマイオス朝最後の女王クレオパトラが、国を保とうと苦勞した話を聞くことがあるだろう。ギリシア人の王朝だから、彼女はギリシア語を話したのだよ。アントニウスとクレオパトラの連合艦隊は、ギリシア西岸のアクティウムの海戦でオクタヴィアヌスの軍に敗れた。エジプトがローマの属州になる。アジア側のアナトリア・シリア・パレスティナ、さらに各地に征服地が広がっていく。

地中海をとりまく広大な領域が、ローマの支配地になった。ローマ帝国の北の国境は、ブリテン島でスコットランドの南まで、大陸ではライン川とドナウ川まで達した。二つの川の北にはゲルマン人がいた。ローマ人は多くの都市を築く。今のヨーロッパの国々の首都や、君たちの聞いたことのある都市の多くが、ローマ時代から発展したのだ。ローマ帝国の支配を受けた地域が、その後もヨーロッパで重要な地位を占める。

これ以後の歴史は、西アジアとヨーロッパと北アフリカの三つの世界が、たがいにかなり強い関係で結ばれて進展することになる。

ギリシアの民主制とローマの共和制は、アジアの専制的な王制と異なる。その違いはどこから来たのだろうか。ギリシアでもローマでも、氏族の長とほかの人々との格差が小さかったのだろうか。また、氏族長のあいだの格差も大きくなく、同輩だという意識が残ったのだろうか。それでも、ギリシアでは、都市国家がほかの都市国家を征服していくことがなかったのに、ローマは、まわりの都市国家を征服してどんどん領土を広げていった。ギリシアは、植民都市が広い地域にできて、そのネットワークとさらに外国との交易で栄えた。ローマは、有力者たちが他国を征服することで利益を得ようとしたのだろう。皇帝になった者もそういう一人だと言える。経済的な利益を求める多くの者たちの欲望が、どんどん領土を拡大する原因だったのだろうか。元首(皇帝)制度になっても元老院が残り、アジアの専制的な王制と違っていた。その差は、経済的なしくみと政治的な慣習として、社会にあったらう。

ローマ帝国の歩み

ヨーロッパの家族制度は、王が男子をたくさんもうけるアジアの風習と違っていた。初めの頃、ローマ皇帝の位は、オクタヴィアヌスカ妻の家の血筋の者が継いだ。

ここでも、皇帝の地位と富をめぐる美しくないことが起き、殺される皇帝も出た。暴君も出た。

やがて、属州に派遣されている軍隊が力をもつようになり、ついに軍人が皇帝になる。二人の息子が専制的な政治をしたあと、元老院は新しい皇帝を選んだ。息子のない皇帝は、すぐれた人物を養子に指名し、5代それが続く。紀元96年から180年までの5賢帝の時代である。5代目のマルクス・アウレリウス・アントニヌスは、『自省録』という思索の書物を残し、ストア哲学のその時代を代表する一人とみなされている。わたたちは名君が出るのを願う。歴史家ギボンには、5賢帝の時代を最初にパクス・ロマーナ(ローマの平和)と呼んで、人類の最も幸福な時代とたたえた。しかし、ローマの平和という呼び方は相対的なものだ。ローマ帝国の支配の構造はゆるんで、すでに衰えのきざしがあった。戦争があり、軍の司令官でもある賢帝は、しばしば馬上にあった。

ローマ帝国は、あらゆる方面で社会制度を整えていく。ヨーロッパのことわざの言うように、ローマは一日にして成ったのではない。軍事上・経済上の理由で、すべての道がローマへ通じるようにつくられた。ローマ市では、水道工事がおこなわれ、たくさんの建造物がつくられた。今もその遺跡が数多く残っている。コロッセウム一つ見てもそのすごさが分かる。ライン川とドナウ川の南に、ローマ文明はしみわたる。市民の生活をしのぼせる円形劇場の遺跡は、西アジアや北アフリカにもある。

歴史を学ぶと、国が栄えたときに人間たちが、政治の分野でないところで、大きな業績をあげたことを知る。詩のウェルギリウスやホラティウス、著作家のキケロやセネカ、歴史家のタキトゥス、天文学のプトレマイオスなどをあげておこう。ローマの学芸は、ヨーロッパ人の古典となっている。その文明と文化を、このぐらいで終わりにしたらバランスを欠くけれど、今はここまで。

中国の後漢時代を書いた歴史書に、166年、ローマの安敦(あんどん)王の使者が後漢の支配していたヴェトナムに来た、と記されている。アウレリウス帝のことだろう。この記録は、海上交易がそこまで広がっていたことを物語る。アレクサンドロス大王の武将がアラビア海を航海したことに触れた。古代エジプトでは紅海が交易路だったろう。ヴェトナムまで達するからには、インド南部から東南アジアまでの海上交易路も開けていたのだ。わたしたちが思う以上に、ユーラシア大陸全体に、物が行きかっていたことを知らされる。

ローマ皇帝の肖像などを見ると、肩から長いゆったりした衣を羽織っている。紫の絹の値段がいちばん高かったらしい。紫の絹は、中国で貴人の着る衣装に使われていた。絹は当時中国だけで生産され、西の世界へはシルクロード(絹の道)を通して運ばれた。海上交通路よりも、この陸上交通路の方が古くからあっただろう。陸路と海路でさかんな交易があったのだ。属州シリアのアンティ

オキア市は、東から来た物を地中海へ送り出す交易都市として、前代も後代も栄えた。

クレオパトラが死んだ頃、パレスティナのユダヤ人もローマの支配を受けるようになった。そのユダヤ教徒の中に、倫理的な宗教運動を指導するイエスがいた。古い神殿を批判してユダヤ人の反感を買い、ローマの総督によって十字架にかけられた。弟子たちは、この死をユダヤ教の救世主と結びつけて、イエスをキリストと呼び、新しい信仰集団をつくる。布教活動はしだいに地中海沿岸の各地におよび、ローマ帝国の首都にまで伝わる。ローマには、ギリシアと同じような神々があり、初めの頃キリスト教は弾圧された。しかし時代が進むと、すたれていく神々に代わって、キリスト教が広まる。

賢帝アウレリウスのあとを継いだ息子は、賢くなくて殺された。属州にあった軍隊は、しだいに現地で兵を集めるようになっていた。再び軍人の皇帝が現われ、少しのあいだ世襲的に継承したあと、こんどは、次々に軍人が皇帝になろうとする時代が50年も続く。26人の皇帝のうち、“暈の上”で死んだのは二人だそうだ。国境地域は外敵におびやかされるようになる。けれども、内部から帝国の体制をこわすほどの勢力は現われなかった。あるいは、有力者たちは当面の利益を得ることに忙しかったのだろうか。284年、バルカン半島の貧しい農民から出た、ディオクレティアヌスという軍人が皇帝に立つ

た。20年ぐらい独裁的に統治して、専制政治へ移っていく。首都を黒海入口の南(アジア側)に移し、別に皇帝一人と副帝二人をおいて分割して統治した。属州のローマとの結びつきが弱まり、政治や経済の重心が移動したことを示すのだろう。

306年、副帝の子のコンスタンティヌスが、ディオクレティアヌス帝のあとの権力争いに勝って、皇帝の位につく。歴史上、宗教は国を心理的に治める一つの手段である。コンスタンティヌス1世は、帝国の立て直しを図るために、キリスト教に改宗し、地上における代表者になろうとした。軍事的な支配権に加え、皇帝に神性の色づけをしたのだ。こうして皇帝は、それまでの元首とは違う専制君主となった。330年に、都をボスポラス海峡の北側(ビザンティウム)に移して、コンスタンティノープルと名づけた。今のイスタンブールである。政治と軍事の制度が変更される。しかし、皇帝にとって、経済が安定したわけではないようだ。

このあとも、ローマ帝国の動揺は続く。身分が世襲的になり、奴隷に代わって小作人を使う大土地所有者が増えるなど、社会と支配の構造も変化していく。寄付を受けてキリスト教会ができると、教会も大土地所有者になっていく。キリスト教が国の宗教とされ、ほかの宗教が禁止されたのは392年である。以前のように神々に祈り占ってもらう者は、異教徒となった。キリスト教が、ヨーロッパの歴史に強い影響を与えるようになる。

3.2 東アジア、インド亜大陸、日本列島の古代

A. 中国の形成

中国文明の発展

君たちの身近に国宝の木造建築がある。部材を組みあげた軒の構造のオリジナリティはこちらにあると主張されても、無益な反論をする必要はない。文明とはそうしたものだ、ということをもう見てきた。日本列島に住む人間は、中国大陸の文明と文化からとても大きな影響を受けてきた。わたしたちの生活の習慣にまでしみこんでいる。いよいよ、その中国の歴史を考えてみよう。

150年前まで日本人の古典だった司馬遷の『史記』の語ることを聞こう。最初の方に、夏(か)と殷(いん、別の名は商)、二つの王朝の歴代の王の名が出る。以前にはフィクションと考えられていた。しかし、亀の甲羅や牛の骨に刻まれた甲骨文字と、遺跡の考古学的な研究によって、商の存在は史実であることがはっきりした。今では、夏も現実にあったと考えるようになった。黄河文明に加え、考古学的に明らかになってきた長江文明が融合して、黄河の流域に都市国家がつくられるようになった、と理解される。

商王朝は、紀元前1600年頃、今の河南省に成立した。遺跡が発掘されている。都市国家がゆるやかに結びつく中で、覇権をにぎった国のような。紀元前1400年代に都の置かれた鄭州市に、都市をとり巻く規模の大きな土

壘が残っている。地方にも、規模は小さいが城壁をめぐらした、都市国家という名がふさわしい都市が見つかる。都が山東省にあったこともある。社会と支配の構造が変化したのだろう。後期には河南省の北部に移り、その遺跡が有名な殷墟(いんきょ)である。のちの英雄たちが取りあう中原(ちゅうげん)と呼ばれる地域は広い。

後期には勢力を広げ、黄河の折れ曲がり点の西、陝西省(せんせいしょう)にまで影響が及ぶようになった。商自身がいくつもの都市国家の連合した、かなり大きな地域を支配する国になったように見える。その内部や周辺に、商の王権をみとめる多くの都市国家があったのだろう。王は、政治的・経済的に大きな力をもった。古代の王家の権威は長く続く。初代の湯王(とうおう)から数えておよそ550年、30代の紂王(ちゅうおう)のとき倒された。

黄河流域ではキビやアワが、長江流域ではコメが栽培された。戦車がたくさん使われるようになり、太陰太陽暦も使いだした。この二つは、西アジアから伝わったのだろう。政治と軍隊の組織がつくられていく。経済的な発展があったはずだ。ほかの地域にない中国の長い伝統は、商の時代につくられ始めた。

商の時代の青銅器を見たことがあるかい？ 重々しいという言葉はあれから生まれた、という感じがするね。青銅器は王権のシンボルで、それを受け継いで支配の正統性を示した。鼎の軽重(かなえのけいちょう)を問うという言葉がある。王権をうかがうという意味だ。王の墓に、

青銅器や中国人の尊んだ玉(ぎょく)などの宝物が埋められた。人間も埋められた。殉葬(じゅんそう)という。奴隸が、死後に仕えるために埋められたのだろう。西の世界と同じく、国家の大事を占うことが行なわれた。占いを甲骨に刻むことが、文字の発明に結びついている。

紀元前 1050 年頃に、陝西省にあった周が、商の紂王を倒して周王朝を建てた。周の武王である。先祖が、西の伯(はく)と呼ばれるほど勢力をのぼしていた。釣好きの人を太公望と呼ぶのを知っているかな。武王の父が、魚釣りをしている人物を見込んで、側近とした呂尚だ。武王が王となるのにも功績があった。商最後の紂王が暴君だったというのは、夏の最後の暴君を商の湯王が倒したという筋立てに似ている。歴史を書く次の王朝が脚色した可能性が強い。もちろん、そのとき前王朝は衰えて、政治がうまくいっていなかったのだ。

武王が死ぬと動乱が起きたが、弟の旦(周公)が 2 代目を助けて平定した。函谷関(かんこくかん)の東の洛陽を拠点の都市とし、東の各地に一族や功臣を配置して支配した。地方の首長を候と呼び、候に領地を与えるのを封じるといふ。それで、この政治体制を封建制というのだ。たとえば、周公旦を魯(山東省)に、太公望呂尚を齊(山東省)に封じた。王族も各地に封じられた。その一人は今の北京あたりの燕(えん)に行った。周の支配する領域が広がっていたことが分かる。前代からの国々もあった。中国には氏族の先祖を祭る習慣があり、夏や商の子孫も候(杞憂の

杞と宋)として封じられている。商代よりも拡大・発展して、国々と人の密度がより濃くなった。初期の周は、大きな領域国家というよりも帝国に近いかもしれない。

ここでも5、6代すると、支配体制がゆるみ始め、紀元前800年代から衰退を始める。最後には、これ以後も中国の王朝でしばしば起きることが生じた。王が側室を偏重して、その子を世継ぎに立てる。内乱が起きて王が殺された。紀元前771年のことである。

紀元前770年、もとの皇太子が即位して周を復活する。根拠地の陝西省を失い、洛陽に都を置くので東周と呼ぶ。もはや周は名ばかりの王国にすぎず、王の命令は行きわたらない。広大な中国でたくさんの国々が争うこの時代を、春秋時代と呼ぶ。大小140国ぐらいあったそう。とくに有力な十あまりの国が、指導権を争った。他を圧倒した者が、諸侯を集めて号令をかけることを望んだ。覇者(はしゃ)という言葉はこの頃生まれたのだ。おじいさんは、『史記』を種本にして話しているのだけれど、たいていの時代小説もそうしているのだよ。大人になったら、ぜひ読むといい。「列伝」にはあらゆる種類の人物が登場して、人間という者を知ることができる。

東の齊・中央の晋・南の楚などが覇者になった。東南の長江の南から出て、呉と越が一時期主役になった。その二つの国が覇者と数えられることもある。呉越同舟、臥薪嘗胆(がしんしょうたん)などの四字熟語の意味を理解し、芭蕉が秋田県の象潟(きさがた)で詠んだ俳句を味わうには、

呉王夫差(ふさ)と越王勾踐(こうせん)の死闘の物語を知っていなければならない。日本語の中に、数えきれない中国生まれの考えと言葉が溶けこんでいる。

戦乱は、国々で社会の構造を変化させる。人々の伝統を重んじる心が古い由来を誇る諸侯の力のみなもとなのだが、それがゆらぐ。戦争では、自前で武装する兵士をいかに多く配下にもつかで力が決まる。諸侯の国々で、兵隊を指揮下におく家臣たちが力を増す。下が上に勝つ下克上(げこくじょう)になっていく。それは、領地の管理権のあり方に連動していただろう。周の分家すじの大国晋が、重臣たちの分捕り合戦で分裂し、結局周王が、韓・魏・趙の3国を侯国として公認する。この紀元前403年以後を、戦国時代と呼ぶのが習わしだ。しばらくすると、魚釣りの子孫の国である斉も、他国から亡命していた大臣によって乗っ取られた。

広い中国の地域ごとに、戦いに勝ちぬく国が、しだいに大きくなり、領域国家のようにになっていく。終盤戦で、戦国の七雄と呼ばれる七つの国(秦・韓・魏・趙・燕・斉・楚)と、まだ自立している小国とだけが残った。それらを合わせた国土はますます拡大する。北では、長城が築かれるようになった。諸侯を王と呼ぶようになる。王という称号がありふれたものになっていく。

春秋・戦国時代、諸国が並び立つ状態になり、商工業が発展し、“国際”交易がさかんにおこなわれた。政治

上のさまざまな考え方が現われ、外交関係のようなことまでこの時代にきたえられた。しかし、経済と政治のことは、これ以上話す力も時間もない。

話すべきことは、変動の続く社会で、人間の精神がきたえられ、数多くの思想が生み出されたことだろう。紀元前 500 年の前後、魯の国に孔丘(孔子)が出た。今も日本で、人間をさとすときの考え方の大部分が、孔子の論じたやり方に基づいている。語ったことが『論語』にまとめられ儒教と呼ばれているが、宗教とは違う。合理的で、「鬼神を語らない」と言った。第一が国を治めること、そこで人の修めるべきことなどを考えたのだ。200 年後に孟軻(孟子)が出て、いわゆる性善説の立場から議論し、孔子の考えを整理した。「易姓革命」という考え方も提出する。王の姓を易(か)え天の命令を革(あらた)めて、行きづまった世を改革するというのだ。王朝の交代を正当化する理論で、中国の政治に影響することになった。

のちに儒教となったこういう考えのほかに、多種多様な議論をした人々が出た。諸子百家と言われている。紀元前 300 年代の莊周(莊子)は、独特の思索をした。老子と合わせて道家と呼ばれるが、ずいぶん違う。孔子の道徳的な考え方に対して、法によって国を治める法治主義を主張した人たちもいた。戦乱の世に、高度な戦争論が『孫子』という兵法書にまとめられた。

中国の社会と文化の基本的なあり方は、春秋・戦国時代につくられた、とすることができる。

中国という帝国

紀元前 200 年代に入ると、七雄の中で陝西省の秦がいちばん強大になる。かつての周のように、函谷関の東をうかがう形勢になった。東周をほろぼした秦で、王子の子の政が位につくまでの話もおもしろいけれど、『史記』にまかせよう。秦王政は、六雄をつぎつぎにほろぼし、紀元前 221 年中国を統一した。アレクサンドロスに遅れることおよそ 100 年である。王の代わりに皇帝という称号をつくり、自分を第 1 代始皇帝とした。

秦は、戦国時代の楚の領域よりも南に進出し、ヴェトナムあたりまで支配下においた。全領土を支配するのに、郡・県の行政区画をつくり、中央から地方政府へ役人と軍隊を派遣した。文字、度量衡の単位、貨幣など、分立していた国々の諸制度を統一する。“中華”帝国ができた。これ以後、中国はいつも帝国をめざす。

始皇帝は、霊峰泰山で秦帝国の設立を宣言したあと、統一した天下を何度か視察した。その最後の旅の途上で急に死ぬ。帝国はまだできたばかりである。国境の守りに狩りだされた農民たちが、到着の期限に間に合わなくなり、反乱を起こす。先頭に立った陳勝と呉広は、「王・侯・将軍・大臣に特別の生まれというのがあるだろうか」という名せりふを吐いた。全土に戦乱が広がる。秦は、皇帝の数を 2 回数えただけでほろぶ。もう一度帝国の作り直しである。いくつもの反乱軍の中で、もとの楚の将軍の一族が中心的な立場を占め、若い項羽が霸王となる。

しかし、庶民あがりのライバル劉邦(りゅうほう)は、打たれ強い人であった。秦の旧領を占領して、東の項羽と対決する。結局項羽は、四面に楚の歌を聞いて、倒された。

紀元前 202 年、劉邦は漢帝国の皇帝になった。長安の都が、秦の都のあった近くに築かれる。秦の郡県制にならないながら、部分的に、息子たちや功臣の封建的な領地を配置した。劉邦の死後、悪名高い呂皇后と呂家の者を、ドラマのようなクー・デターで倒した家臣たちは、劉邦の息子の一人を皇帝に立てた。次の代に一族の封建領主たちの反抗を鎮圧する。紀元前 141 年、武帝が継ぐと、帝国は中央集権的な郡国制になった。この時代に形が定まった文字が漢字である。儒学が国学に指定されて、儒教的な考え方が広まる。漢のさまざまな制度は根づいて、その後の中華帝国のお手本になった。

秦が中国を統一すると、北の遊牧民への対策が大きな課題となり、戦国時代からの長城を拡張した。その時代の遊牧民を、中国側は匈奴(きょうど)と呼ぶ。漢と同じ頃統一をはたし、モンゴル平原の東の山脈から西の天山山脈までの、広大な地域を支配した。劉邦が遠征に出たが大敗する。皇族の女性を匈奴の王の妃とし、毎年贈り物をするので戦争を終わらせた。だが、武帝が立つと、力をたくわえた漢は攻勢に出る。侵入していた匈奴を北の草原へ追いはらい、西には四つの都護府を置いて敦煌(とんこう)まで領土にする。最大のときには、天山山脈の南の西域諸国も支配した。南はヴェトナム北部まで征服

して南シナ海沿岸を9郡に分け、東も朝鮮半島に侵入して4郡を置いた。中国はいつもこの領土をめざし、周辺諸国はそれを押しもどすという歴史を歩むことになる。

統計を信じれば、人口は約6000万人あったらしい。郡は県に、県は郷に分けられていた。郷はいくつかの里(集落)から成る自治的な区域で、自営農民が中心だったらしい。田畑の税は収穫の1/30で、人頭税を銭で集めたそうだ。貨幣も流通していたのだ。西域へシルクロードができて、東西の文物がさかんに行きかうようになった。張騫(ちょうけん)のような人が遠く旅をして、西域のことがいっそう知られるようになる。しかし、漢は農業中心の政策をとり、塩などの重要な商品を専売にし、戦国時代以来の商工業の発展はむしろおさえられた。

朝鮮半島に4郡を置いたのは、紀元前108年のことである。支配下に入らなかった半島南部も、中国の影響を強く受ける。そして倭人たちも、中国文明をそれまで以上に受けとることになっただろう。

中国の宮廷は弱点をもつ。皇后の親戚の男が、出来の悪い時代劇のような筋書きで、それほど衰えていなかった漢を乗っ取って、紀元8年に新という王朝を建てた。儒教の信奉者で改革をめざしたが、混乱を招いて、民衆の反乱をきっかけに動乱になる。その中から、湖北省の劉姓の豪族が勝って、25年に漢の皇帝の位についた。武帝の父の景帝から数えて6代目、後漢の光武帝である。

洛陽に都を置いたので東漢ともいう。後漢は、混乱した中国を平定して、武帝のときと同じぐらいの領土を回復する。ローマ帝国へ使者を送っている。

時を経て、郷と里の社会がくずれ、大土地所有者が現われるようになっていた。各地に勢力をはる豪族が生まれる状況の中で、後漢の政権ができたのである。光武帝を助けた豪族が王朝で大きな力をもつ。この流れが続き、豪族たちは勢力を誇る門閥貴族になっていく。

この時代に、蔡倫(さいりん)という人が紙の製法を革新した。それまで竹や木の板に書いていたのを、軽くてかさばらない紙に記録できるようになった。武帝の時代の作品『史記』は紙に書かれたのではない。前漢の歴史を書いた班固の『漢書』もそうだろう。班固の死後、妹の班昭が一部を補足した。りっぱな女性がいたのだ。

後漢の支配もゆるみ、184年反乱が起きる。乱に参加した民衆の目じるしから、黄巾の乱と呼ばれる。新のときの乱は赤眉の乱という。世は乱れて群雄の争う時代が来る。群雄の一人曹操が中国北部を平定し、その子が後漢の帝位を奪って魏を建てると、南部を支配した孫権と劉備も皇帝を名乗って、魏・呉・蜀の分立する時代が30年あまり続く。魏から帝位を奪った晋が中国を統一するのは、280年のこと。もっと『三国志演義』の物語を話さないと、君たちは怒るだろうか。種本の、晋の時代に陳寿の書いた歴史書『三国志』を読んでくれたまえ。おじいさんはまだ読んでいないけれど。

B. インド亜大陸の古代

インドでは、インド・ヨーロッパ語族のアーリア人が、紀元前 1500 年頃に北からやってきて、しだいに南に広がって定住した。アフガニスタンの方から入って来た、と考えられている。つけたせば、イラン人という呼び名は、アーリア人という自称からきている。その後もときどき、北からインドへ侵入した集団が、北インドの歴史を書いた。今も、アフガニスタンとパキスタンの国境地帯に、同系統の人々が暮らしている。インドは亜大陸と言われるほど広く、各地方で違う言葉話し、地方文化の独自性が濃い。現代までその多様性を保ってきた。イギリスから独立した時には、公用語のヒンディー語を話す人々が少なかったそうだ。

アーリア人が上層階級として支配し、先住の人々はそれに混じりあって、融合された宗教ができていく。バラモン教の神々への賛歌と聖典とが、紀元前 500 頃までつくられた。結局バラモン教は、土着の民間信仰などを吸収して、今日ヒンドゥー教と呼ばれるものになる。アーリア人は征服した人々を差別した。ついには、人を生まれによって、司祭・王侯や騎士・庶民・隷属民に分ける身分制度になった。のちにやって来たポルトガル人が、それをカーストと呼んだのだそうだ。現代社会にまで影を落としている。

農業が発展し商業もさかんになって、紀元前 500 年頃には、ガンジス川の中流域を中心に国々が競争するようになった。社会の変化の中で、ジャイナ教などバラモン

教と異なる教えを説く運動が起きた。ゴータマ・シッダールタは、自我の存在を否定し、人格的な神を置かずに、人間の苦悩から脱する思想を説いた。死後、弟子たちのグループはしだいに原始仏教の教団に発展する。初期の修道を重んじる小乗仏教は、スリランカや東南アジアに広まる。時が経つと、悟った人であるブッダの説く經典の形にして、さまざまな思索にふくらんだ。修道者以外の救いも説く大乘仏教は、北の地方で発展し、東アジアに伝わった。日本の仏教はその流れに属する。

ガンジス川中流域の国々の中から、マガダ国が強大になっていった。アレクサンドロスがインド北部に至ったあと間もなく、紀元前 317 年頃、チャンドラグプタ王が北インドを統一した。マウリヤ朝という。ギリシア人たちの建てたバクトリア王国の南部も奪った。紀元前 200 年代半ば、孫のアショーカ王のとき、半島の南の端をのぞくだけの、インドの歴史上でも最大の帝国になる。都は昔ゴータマが説法をして歩いた地域にあり、仏教と縁が深かった。アショーカ王は仏教に帰依して、仏教的な政治をめざしたが、死後国は衰え、紀元前 100 年代に入ると、帝国はほろんで分裂する。

中国の西、今の甘粛省にいたイラン系遊牧民が、匈奴に追われて中央アジアに移動すると、バクトリア王国をほろぼした。中国の歴史書では、この国は大月氏と呼ばれている。やがてその地域を、その地から出たクシャーナ族が支配する。クシャーナ朝は、さらにインド北部ま

で征服して、1世紀から3世紀中頃まで支配した。中央アジアが諸民族の行きかうところだ、ということが分かる。クシャーナ朝も仏教を保護した。この時期に、ナーガルジュナという人が大乘仏教の理論を完成した。クシャーナ朝の領土には、以前ギリシア人の建てた国バクトリアがあった。ブッダはそれまで絵や彫刻に表わされることはなかったが、受け継がれていたギリシアの造形美術が、仏像をつくるようになった。今のパキスタン北部のガンダーラというところだ。

クシャーナ朝が分裂したあと、もとのマカダ王国のあったところからグプタ朝が出て、320年頃、中部インドを統一する。またチャンドラグプタという名の王が出て栄えた。この王朝でインド文化は大きく花開く。仏像もインド独自の表情を帯びるようになる。中国の法顕が、本場の仏教を求めてインドに来たのはこの時代である。400年頃中国を出て、シルクロードからインドに入って長く巡礼し、帰途はスリランカに行き、海に出て東南アジアを経て帰国した。60歳を超えてからの足かけ14年の大旅行であった。なんという情熱だろう。しかし、ヒンドゥー教がインドをおおうようになっていく。

インドの豊かな歴史を、かけ足でしか語れないのを許してほしい。その独自の文化は貴重なものにちがいない。仏教を通して、インドの思想が日本にとけこんでいることを忘れてはいけないうらう。

C. 日本列島の古代

日本列島の人々は、アメリカ大陸の人たちのようにゼロから始めたのではないだろう。興味深いことに、土器をつくり始めた時期については、世界でも古さを競うほどだ。炭素 14 を使う物理的な測定で、約 1 万年前になる。貝塚や縄文式土器のある遺跡が、九州から北海道まで見つかっている。青森県の三内丸山遺跡のことはすでに話した。5000 年ぐらいいさかのぼるらしい。この頃には、畑で栽培する稲の花粉が見つかるようになる。縄文時代はもっと遅れた時代と思っていたけれど、そうでもないことが分かってきたわけだ。縄文時代の後期になると、大麦、アズキ、アワなども栽培されたようだ。だとすれば、それらは大陸からもたらされたのだ。

次は、弥生式土器で代表される時代になる。以前には、水田での稲の栽培を、紀元前 500 年もさかのぼらないと考えて、土器の特徴の移り変わりを見て、前期・中期・後期と時代を分けていた。ところが最近、炭素 14 を使う年代測定が、水稻が紀元前 1000 年近くへさかのぼることを示した。弥生時代の歴史は、もっと慎重に調べ直される必要が出てきた。

古代の中国は、日本列島の住民を倭人と呼んだ。周王朝の 2 代目のとき倭人が来た、と書いている書物がある。新しく測定された稲作の時期から遠くない。この記事を一いちがいに否定できないだろう。歴史書『漢書』に、朝鮮半島のむこうの海に倭人の国が百あまりあって、とき

どき使者が来ると書いてある。また、後漢の歴史書には、57年、倭奴国からみつぎものをもって使いが来たので、光武帝が印綬(いんじゅ、位を示す)を与えたとある。実際に福岡市で見つかった金印を、君たちは見ているね。

前漢よりも二、三百年ぐらい前に稲作が始まったという以前の考えだと、ギリシア人がシチリアに植民したように、進んだ農耕生活一式をもって九州に植民したと考えるのに近いだろう。しかし、前に住んでいた場所についての伝承はない。紀元前1000年近くの頃から始めたというのであれば、北部九州で稲作を始めた人々は、そういう植民ではなくもう少し苦勞して、前漢の頃に国々をつくるようになったのだ。

金印には「漢委奴国王」と刻まれている。『後漢書』本文は、この国を倭奴国と呼んでいる。中国でよくするように、倭と同じ発音で単純な委の字を彫りこんだのだろう。これを「わのなのこくおう」と読む根拠はない。金印は中国でもほとんど残っていないが、後漢で王を授かった者は多くない。倭奴国の王は、倭人の国々の代表として授かったと考えられる。一般的な世界史のあり方からしても、倭奴国は倭人の国々の覇者、という見方がなりたつだろう。107年にも使者を後漢へ送った。

倭人のことは、後漢のあと魏・呉・蜀の三国に分かれていた時代の、歴史書『三国志』にも書かれている。漢の時代に100国あまりだったが、魏に使いを送る国が30と記されている。次の晋の時代の史書にも出る。238年から266年にかけて、魏および晋とのあいだに何度か使者

のやりとりがあった。覇権国の女王卑弥呼が使者を送り、みつぎものを献上したら、魏は卑弥呼を「親魏倭王」の位につけ、金印紫綬を与えた。また金印をもらったのだ。歴史の証拠になるはずのこの金印は見つかっていない。魏の使者が倭に来て、倭国への道すじやその風俗などを記している。後漢のときも今度も奴隷が献上されている。身分の違いがあることも書かれていて、卑弥呼が死ぬと百人が殉葬させられたとある。人々が階層に分かれ、社会に強い支配構造ができていたのだろう。戦争のことも書かれ、次も女王が立ったとある。

ところが、この時代のことを書いた『古事記』と『日本書紀』は、奈良盆地の歴代の首長のことを物語るが、女王はいない。『記紀』はその首長権を強く主張するように書いてある。第二次世界大戦まで、近代天皇制のイデオロギーがそれを真実として公認したが、その反動で敗戦後に、そこに書かれた最初の方はフィクションだとされた。そうすると『記紀』を無視して、奈良に二人の女王がいたとすることもできる。考古学は具体的な歴史を語れないから、卑弥呼がどこにいたか、長く論争が続いている。おじいさんは、欲をかかず合理主義にとどまり、具体的な物語をつくることを慎むべきだ、と思う。

1世紀から3世紀に、中国王朝が覇権国に金印を与えてよいと判断するほどの、進んだ国々ができていた。使者が滞在するほどだ。貴族の生活水準はかなり高かっただろう。王の近くに漢字を理解できる者がいたはずだ。